

日本語と日本文学

第 63 号

パネルディスカッション「死生観の向こうに」

「鬼神」について 小松 建男 (3)

古代日本の死生観

——人麻呂挽歌とその周辺—— 茂野 智大 (9)

高校国語総合の現代文教材における死生観

..... 各務めぐみ (19)

学習の系統性を意識した古典作品の教材研究

——『竹取物語』を素材として—— 西 一夫 (31)

『不白翁句集』「春之部」

——川上不白の句作からみる茶の湯観—— ... 石塚 修 (43)

内閣文庫蔵天文五年写『三体詩幻雲抄』

における宋詩の引用状況 劉 玲 (左) 1)

対象変化構文の格と動詞について

..... 神永 正史 (左) 23)

平成30年 2月

筑波大学日本語日本文学会

死生観の向こうに

人は死なるものを知っているが、自己の経験として理解することはできない。生の限界たる死の不可解さはまた、自己の生の全体的把握をも妨げる。死と生の向こうした不可解さは、様々な時代や地域において多様な想像的観念を惹起し、やがて生まれた死生観は各々の文化を方向づけてもきた。生死の問題は言わば、時代や文化の特徴を示すひとつの指標ともなり得るものである。こうした問題意識に基づき、我々は中国文学、日本文学、国語教育の観点から死生観を取り扱う。小松氏は基調講演において、中国古典、特に古典小説中の鬼神のあり方から、茂野は『萬葉集』、その挽歌における死別の表現から、各務氏は現代の高校国語教科書、そこに採られた生死を扱う教材から、各々に見出される死生観とその先に立ち現れる諸問題とを指摘する。元より死は生けるものに等しく訪れる。異なる三つの観点から生死に光を当てることで、この普遍的な事象に発して行き着く先の差異及び同一性を、ひいては各時代、地域、分野の様相をも照らし出そうとする試みである。(茂野)

投稿規定

- 一、投稿資格を有するものは、本学会の会員とします。
- 一、投稿論文は四百字詰原稿用紙四十枚（二万六千字）程度。ワープロ原稿の場合はハードコピー二部に電子媒体ファイルを添付してください（原稿と電子媒体は原則としてお返しいたしません）。
- 一、投稿は、毎年度二月末日までに、編集委員会あてに送付してください。
- 一、投稿論文の採否は、編集委員会で指名する複数の査読者による審査をへて、編集委員会で決定して投稿者に報告します。
- 一、本誌の論文は、筑波大学附属図書館のつくばリポジトリに登録され、全文データベースとして蓄積・利用されます。

一、原稿送り先

〒305-8717茨城県つくば市天王台一丁目一―一

筑波大学人文社会系文芸・言語専攻

筑波大学日本語日文学会

『日本語と日本文学』編集委員会

（編集委員）石塚修（委員長）・大倉浩・

甲斐雄一郎・清登典子・沼田善子

投稿案内

本誌では会員の皆様の御投稿をお待ちしております。

学会機関誌はいうまでもなく、学外のOB、学内の教員および学生の三者が一体となって、当該学問に貢献しうる学問的成果を公表してゆく媒体として存在するものがあります。従いまして、本誌の一層の充実には、この三者の構成員の熱意に負うところが多大であります。本誌の価値を高め発展させてゆくためには、これら構成員から質の高い論文の投稿を仰がねばなりません。構成員、とりわけ学外のOBの皆様の積極的な御協力を願う次第です。

投稿は「投稿規定」により、また投稿原稿は編集委員会の審査を経た上で掲載させていただきます。なお、抜刷の作製料については投稿者の御負担とさせていただきます。御了承下さい。

編集後記

第六十三号をお届けします。

今回もなかなか原稿が調えられずに予定どおりの刊行にいたらず、執筆者ははじめ皆様にはご迷惑をおかけいたしました。円滑

な刊行をめざしていきたくと考えていますので、会員の皆様にはぜひとも積極的に投稿いただきますようお願い申し上げます。

いよいよ来年度は平成も最後の歳になり、筑波大も学位プログラム化にむけて新たな再編が進行中です。少子高齢化社会のなかで、大学もふくめ日本の構造改革は必須ですが、目先にとらわれて大局を見失うことのないよう、「米百俵」の精神は堅持してまいりたいものです。

（編集委員長 石塚）

平成三十年二月二十八日印刷
平成三十年二月二十八日発行

〒305-8717茨城県つくば市天王台一丁目一―一

筑波大学文芸・言語専攻

編集・発行 筑波大学日本語日文学会

代表者 矢 澤 真 人

印刷所 第一印刷株式会社

☎〇二八二(三二)一五五一